『剣道からの教え』

北海道
千歳明徳館
中学１年生　　執　行　　圭

僕は、小学校６年生のとき、「剣道をしてみたいな！」と両親に言いました。特に、理由はなくて、ただ剣道が、かっこ良かったからです。

その時に初めて自分から何かをしたいと思いました。

そこで父が、剣道に励んでいる「千歳明徳館」を探してもらい稽古を見に行くと、道場からは、「ヤァー」と、言う勇ましい声や、「バァーン」と力強い打ちを聞いて、僕もあの中でやってみたいと思いました。

入団して稽古は初級組から始まりましたが、思っていたよりも大変でした。

周りにいる小さな子供達が簡単にしていることが、僕にはできなくて、毎回苦しい想いをしていました。

小さな子供達に負けたくない一心から、稽古で習ったことをノートに書いて覚え、覚えては自主稽古をして、少しでも追いつくようにしました。

防具をつけて稽古をするようになると、切り返しや、かかり稽古などと言った新しい言葉が出て来て、周りにいた人達に教えてもらいました。

教えてもらったことは、ノートに書いて忘れないようにしました。

又、先生方は剣道ノートに、一つ一つわかりやすく毎回、役に立つアドバイスを書いてくださり、僕はそれを直す意識を高く持ちました。

教えてもらったのは先生方だけではありません。

稽古仲間は、自分の打つ番なのに、手を止めて親切に教えてくれました。

辛い稽古でも、周りの人達がとても良くしてくれたので、苦しさよりも楽しみの方がつよく、毎日の稽古をとても楽しみにしていました。

でも、剣道は楽しいけれど、皆よりも遅く始めたので、皆に追いつきたくて焦る事ばかりでした。いつも、いつも、僕は、人の倍以上に努力しました。

しかし、稽古で疲れた時には、親の一言にそのイラ立を親にぶつけてしまうことがありました。悪い事とはわかっていても、何度もそれをくり返してしまいました。

ある日、稽古で疲れてイライラしていた時に、先生が皆の前で言いました。

「稽古は、一人でやっているのではない。仲間と大きな声を出してやっているから、苦しい事も出来るんだ。周りの人達が協力してくれているから稽古が出来るんだ。」との話しを聴いて僕は反省しました。

いつも、楽しいと思って行く稽古も、両親が送迎してくれ、防具も両親が買ってくれたものです。自分が疲れているからといって、親にぶつけていました。もっと人のことを考えられるようになりたいと強く思いました。

僕は、始めた頃は、強くなりたいとしか思っていませんでした。されど、公式大会では一回しか試合で勝ったことがありません。

初めて勝った時は、今まで先生の言った通りに練習をがんばって良かったと思いました。

今は勝てなくても、皆よりも沢山稽古をして、絶対に皆に追いつきたいと思います。

そして両親による日々の稽古の送迎や、悪いクセを直そうとアドバイスしてくれる先生方にむくいるためにも、二勝を目指してがんばりたいと思います。

「守、破、離」今は、「守」の段階です。基本をしっかりと身に付け、仲間との絆を大切に、目標である強くなることと、周り人達の支えに感謝できる人間になりたいと思って努力しています。